

# 黎明期の知床観光—観光関連資料からみた 知床の観光地化と観光拠点の変遷

平井 純子

357-8555 埼玉県飯能市阿須698, 駿河台大学現代文化学部

## Dawn of Shiretoko Sightseeing—What Does the Document of Shiretoko Sightseeing in 1950s and 1960s Imply?

HIRAI Junko

Faculty of Contemporary Cultures, Surugadai University, 698 Azu, Hanno-shi, Saitama 035-8555, Japan. [jhirai@surugadai.ac.jp](mailto:jhirai@surugadai.ac.jp)

This article analyzes historical material of 1950s and 1960s to clarify the dawn period of Shiretoko sightseeing. The result is as follows: (1) People had recognized Shiretoko as a tourist attraction around 1960, affected by the movie and mass media; (2) In this period, tourist attraction of Shiretoko sightseeing has been changed into natural scenery place demanded as a national park.

### はじめに

年間250万人の観光客が訪れる知床。縄文期から人間の営みが見られる地域ではあるものの、知床の語源がアイヌ語のシリエトク(=地の果てるところ)を意味するように、人々を容易には近寄らせてこなかった。とはいえ、戦前期に観光旅行が大衆化した1936(昭和11)年頃、北海道観光もピークを迎え(佐藤1999)、知床では観光のための鳥瞰図が作成された(乙部2008)。しかし1937(昭和12)年より始まる一連の戦争により、全国的に観光空白の時代を迎える(白幡1996)。

戦後10年にわたる復興期を経て、「もはや戦後ではない」と、日本は高度経済成長期に突入した。経済成長により人々の所得は飛躍的な増大をみせ、自由裁量的な消費支出の比率が高まった。また個人所得の増大とともに、余暇時間も大幅に増え、これらの要因を基盤とした戦後のレジャーブームが広がった(池田ら1989)。これらの流れに影響を受けつつ、観光地として知床は萌芽期を迎える。

知床の観光の概況を述べた斜里町史第三巻編集委員会(2004)は、知床が観光地として脚光を浴

びた時期を1958(昭和33)年の斜里-ウトロ間の道路開通以降であるとし、同年12月の斜里バス株式会社(以下斜里バス)によるバスの運行開始がウトロの観光地化と、知床観光の機会創出の画期であったとしている。また知床の農業開拓に注目した梶嶺(2007)は、1961(昭和36)年の知床国立公園指定答申と1962(昭和37)年のウトロから知床五湖への道路の着工、翌1963(昭和38)年に始まる知床横断道路の着工といった推移から、1961(昭和36)年頃に幌別・岩尾別地区における知床観光化の転機があったとしている。乙部(2009)は、幌別と岩尾別地区で開拓農家が生活した時代を紹介する中で昭和30年代の知床の観光について触れ、1960(昭和35)年公開の映画『地の涯に生きるもの』を契機に、1960(昭和35)年頃から観光地化がすすんだことを示唆している。知床が観光地化した時期の認識には、若干のバラつきがみられるのである。

知床はいつから観光地として認識され、また、観光客は何を求めて知床を訪れたのだろうか。そして、現地では観光地として何をアピールしたの

だろうか。本研究では1950年代-1960年代を知床観光の黎明期と位置づけ、当時の観光関連資料を検証することで、観光地としての知床の観光拠点の変遷について考察する。

## 方法

本研究では観光関連資料として、新聞、雑誌、パンフレットを取り上げた。対象とする時期は、戦後の1945(昭和20)年から1966(昭和41)年とした。1966(昭和41)年を区切りとしたのは、農業開拓で幌別・岩尾別地区に居住していた住民の多くが斜里市街地に集団移転し(斜里町史第三巻編集委員会2004)、国による開拓事業が一応の終止符を打った年であること、同年4月1日に羅臼地区に国立公園管理官が配置され(羅臼町百年史編集委員会2001)、知床国立公園の保護管理が行われるようになった年であることによる。

新聞は、大衆にイメージを植え付ける影響力の大きいメディアである。新聞における報道は、観光客にとっての情報源のひとつであり、当地のイメージを左右するものともなる。ここでは都市部における購読者数が多い朝日新聞を取り上げ、知床がどのように取り上げられているかを分析した。

1924(大正13)年から2004(平成16)年1月号までの間、JTB(日本交通公社)により刊行された雑誌『旅』は、日本における旅行に関する情報誌としては最も古いものである。同時期に旅行関連の情報誌が少なかったことから、国内外の観光情報を掲載した当誌は、旅行者の情報の収集のため利用されていたと考えられる。ここでの知床に関する記事を取り上げ、内容を分析した。

上記の2点は知床に向かう観光客のもつイメージを分析するものであるが、これらに加え知床から観光客へ発信する現地作成の資料を取り上げることとする。知床における観光を考察する際、当地の主要公共交通手段となった斜里バスの存在は欠かせない。斜里バス社史編集委員会(2000)によると、斜里バスは1950(昭和25)年に創業し、斜里、知床地域を中心として路線網の拡充を行ってきた。また、パンフレットや時刻表などを随時発

行している。ここでは斜里バスが所蔵する資料の中で、特に観光パンフレットを取り上げ、分析を行った。斜里バスの観光パンフレットでは、地元が想定した観光客を誘致すべき観光拠点が記され、その変遷から知床がアピールとすべきものをどのように認識し、また変化させていったかが推察できるからである。

## 朝日新聞記事にみられる知床

1945(昭和20)年から1966(昭和41)年の間、「知床」というキーワードが含まれる記事は17確認でき、その内容から4つに分類できた(表1)。

戦後初めての記事は、1950(昭和25)年1月9日の「知床連峰を征服 京大 山岳部一行」である。伊藤洋平を隊長とする京都大学山岳部12名が、前年12月16日から知床連山を縦走し、最後の硫黄山を登頂して羅臼に下山したことを報告するものである。

1955(昭和30)年8月15日には科学面で、農林省林業試験場技官宇田川龍男により「千古の秘境・知床半島の動物」「ヒグマの遊ぶ楽園 空飛ぶ“王者” オジロワシ」といった見出しでの記事が寄せられる。知床の生物資源保護を目的とした調査での見聞であるため、知床の自然や環境の現状の把握は詳細で正しい。紙面の1/4を割いてカモメ、ウミウ、ハシボソミズナギドリ、エゾライチョウ、アマツバメ、アシカ(トドカオットセイの誤認であろう)など多くの野生生物、ヒグマの骨やエゾシカの角が多く出土する貝塚や先住民族の穴居跡などの遺跡、カジカの味などについて述べ、「エゾオオカミを絶滅させた北海道の開拓史を繰り返すべきではない」と結んでいる。

1959(昭和34)年7月2-30日までは、横浜市立大学の知床半島学術調査隊に関する記事である。知床半島を縦走して自然および人文調査を行ったもので、A、B、C隊のそれぞれの動向について記事は大きくはないものの、7回にわたり報告している。過去に冬の縦走がなされているからであろうか、30日には注として「知床半島の主脈はハイマツが濃密に生い茂り、雪に覆われた冬よりも、夏の縦走を困難にし人跡を拒み続けてきたもので

表1. 1950-66年に朝日新聞に掲載された知床に関する記事.

	記事内容			
	探検	自然と産業	番組紹介	国立公園
1950 (昭和25)年01月09日朝刊	○			
1955 (昭和30)年08月15日朝刊		○		
1959 (昭和34)年07月02日朝刊	○			
1959 (昭和34)年07月07日朝刊	○			
1959 (昭和34)年07月09日朝刊	○			
1959 (昭和34)年07月16日朝刊	○			
1959 (昭和34)年07月29日朝刊	○			
1959 (昭和34)年07月29日夕刊	○			
1959 (昭和34)年07月30日朝刊	○			
1960 (昭和35)年11月12日朝刊			○	
1961 (昭和36)年12月13日朝刊				○
1962 (昭和37)年09月02日朝刊		○		
1963 (昭和38)年10月22日朝刊			○	
1964 (昭和39)年05月05日朝刊				○
1964 (昭和39)年05月29日朝刊				○
1965 (昭和40)年11月05日朝刊				○
1966 (昭和41)年08月21日朝刊		○		

ある」とされている。

1960 (昭和35)年には「秘境『知床半島』を放送」「五ヶ月間も現地取材 北海道東北端 自然と生活を伝える」とする日本テレビによる番組の広告である。3回にわたり取材をしたとのことで、1回目は6月下旬に作家戸川行男 (原文ママ) とともに彼の小説「オホーツク老人」を原作とする映画『地の涯に生きるもの』の舞台を取材したという。2回目は9月25日-10月8日まで北大の潜水調査船「くろしお」に便乗し羅臼の漁田を取材、そして3回目は10月13-31日で斜里の農業や漁業、羅臼のイカ釣りや小学校の様子を取材している。

1961 (昭和36)年12月13日には「南ア、知床など四か所 国立公園候補地に答申」として南アルプスや白山、山陰海岸とともに知床が国立公園候補地になったとの小さな記事があった。

1962 (昭和37)年9月2日は日曜版の「旅」のページで、紙面3/4を占め知床半島を紹介している。小見出しに「すしづめ12万人」とあり、ウトロには「四軒しか旅館がないところへ12万人もの観光客が押しかけたのだから無理もない」といい、鳥や動物の楽園だが、漁師たちは「ひる近くになると乗組員が茶ワン酒をはじめ、これはショ

ウチュウだからと、わたしにビールびんを差し出した」という。昆布漁に駆り出される小学生のための夏の巡廻授業や8月でも夜にはストーブが必要な時があること、人食い事件があった番屋などが紹介される。また「痛しかゆしの観光」として、知床が世間知られるようになったのはごく最近のことで観光客が激増していること、国立公園に指定されるとさらに増加すると想定されること、自然環境のためには観光地化を歓迎しないむきがあること、鉱山資源があることを述べ、「汽車の接続ダイヤをバス会社で聞いても『分からない』これで結構押すな、押すなだ」と結び、当地の混乱の様子を皮肉っている。案内メモとして、交通手段と宿泊施設、海の幸紹介、地名とアイヌ語についての説明と、参考書として戸川幸夫の『知床半島』(1961)が紹介されている。

1963 (昭和38)年10月22日は、NHKラジオ第2の番組「知床に生きる老人の孤独 現地で波や野鳥の声を収録」の紹介である。網走、斜里地方で収録した音を使用しているという。

1964 (昭和39)年5月5日は「国立公園に知床・南ア」として、自然公園審議会の審議結果が厚相に答申されたことが、同月29日には国立公園にな



図1. 第2次国立公園切手シリーズ第12集, 知床国立公園の5円切手(斜里バス株式会社蔵)。

ることが決定したことが掲載されている。

1965(昭和40)年11月5日には、郵政省が第2次国立公園切手シリーズの第12集として、5円と10円の記念切手を販売するとして記事が掲載された。5円の図柄は斜里海岸から硫黄山を見た風景(図1)、10円は羅臼湖の三の沼から羅臼岳を見た風景である。

1966(昭和41)年8月21日は、「教え子はコンブ番屋に」「巡回指導する知床の先生」と題する羅臼を舞台にしたカメラルポである。紙面の3/4を使い、コンブ干場、コンブをのす様子、そして巡回する先生と子どもたちの様子が写真で紹介されている。漁民の不漁と、時間が少なく子どもたちへの指導が十分にできないとしている。

### 雑誌『旅』にみられる知床

1945(昭和20)年から1966(昭和41)年の間、知床に関する記事は14編、確認できた(表2, 附表)。

戦後初めての記事は、1950(昭和25)年に北海道

根室出身の作家寺島柁史が松浦武四郎の『知床日誌』をもとに記述したものである。「特に面白さうな個処を抜書し、これに私見を加えて、世の好事家の話題に供してみよう」とし、武四郎の記録をベースに自身の体験談を加えつつ語っている。著者は羅臼を訪れた経験から、宿屋の様子や地元料理、交通の便など羅臼周辺の記述が詳細である。

1951(昭和26)年は、M記者の名で「斜里という町」(表題の「斜」の偏が「金」となっている)が書かれている。斜里が辺鄙で田舎じみていることが強調され、斜里の人は目の前に海があるが港が整備されていないため新鮮な魚が食べられない、とする。先史時代の遺跡について記載があるものの、具体的な地名はない。知床には熊が多いので、観光客のために一日も早く半島を一周する道路を造ってほしい、と締めくくっている。

1953(昭和28)年と1955(昭和30)年は、京都大学教授の医学者で登山家、そして1950(昭和25)年の冬の知床縦走の隊長であった伊藤洋平が記事を寄せている。両者ともに対象は羅臼で、町の素晴らしさと人々の厚意、そして自然環境の厳しさとそれゆえのエピソードなどについて、情感を込めて記述される。また、新聞紙誌上から想像した知床半島はソ連(現在のロシア)との関係で極度の緊張状態であると思っていたが、実際は平穏であることが意外だったとしている。

1955(昭和30)年のグラビアは、6枚の写真が盛り込まれる。「絶壁、奇岩、瀑布、温泉、原生林のすばらしい観光地だ」と述べるものの、「鉄道も通らぬため人はまったく訪れない。」としている。

以上の記事は著者のスタンスがいずれも「秘境紹介」であったが、これ以降の記事は知床を「観光地」として記述するようになる。

1959(昭和34)年7月の「オホーツク海から知床岬をさぐる」では、知床半島を「北海道最後の観光地」とし、写真を多用しつつ10ページにわたり紹介している。案内として宿屋が2軒、1泊700円であること、網走-ウトロ間は定期船で4時間、この年の10月からはウトロ-オシンコシン間の道路が開通し、斜里-ウトロ間にバスが開通すると記される。本文は知床の自然を絶賛し、マスの定

置網やジャガイモ作りなどの産業について述べつ、陸の孤島であることを積極的にアピールする内容となっている。

1960(昭和35)年8月は、同年に公開された映画『地の涯に生きるもの』の原作『オホーツク老人』(1959)の作者である作家戸川幸夫により記述される。知床は凄惨原始境ではあるが、海上からの探訪ならば誰にでも可能であるとし、羅臼と斜里からの2コースを紹介する。知床を満喫したい観光客だけでなく中年や老年、子連れの場合を視野に入れ、解説がなされる。また寒さ、船酔い、観光船乗船時のトイレの配慮、毒虫の多さ、登山時の安全確保など、事細かに注意喚起をしたうえで、

「こうした苦勞をしても、それにあまりある大収穫が得られるに違いない」としている。

1962(昭和37)年は紀行文学賞候補作品であり、一般旅行者による旅行記である。斜里からバスでウトロに向かい、ここから船で奇岩や絶壁の美を堪能している。「白いのがカモメ、黒いのがウ、黒くて足が赤いのがカモです。」という船頭の言葉があるが、カモというのはウミスズメ科のケイマフリであろう。現在は環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類であるが、当時は現在よりも数が多かったものと想定される。著者には普通の旅行者とは違う旅をしていると意識があり、また知床の観光地化を憂えている。

表2. 1950(昭和25)–1966(昭和41)年に雑誌『旅』でとりあげられた知床の記事。

No.	発行年月 (掲載ページ)	タイトル	著者	記述スタンス
1	1950(昭和25)年10月 (pp. 74–83)	納沙布半島と知床半島～松浦竹四郎 の日記から～	寺島柁史(作家)	秘境紹介
2	1951(昭和26)年2月 (pp. 24–27)	斜里という町	M記者	秘境紹介
3	1953(昭和28)年6月 (pp. 84–87)	北國の上アゴにさがった“ひげ”～ “陸の孤島”知床紀行～	伊藤洋平(医学者・登山家)	秘境紹介
4	1955(昭和30)年6月 (グラビア)	国境の岬・北知床をゆく		秘境紹介
5	1955(昭和30)年6月 (pp. 28–29)	北知床をさぐる	伊藤洋平(医学者・登山家)	秘境紹介
6	1959(昭和34)年7月 (pp. 57–66)	オホーツク海から知床岬をさぐる		観光地
7	1960(昭和35)年8月 (pp. 42–43)	知床半島のAからZまで—日本離れ した北辺の秘境探訪者のために—	戸川幸夫(作家)	観光地
8	1962(昭和37)年5月 (pp. 134–138)	北の果を行く～知床半島へ(紀行文 学賞候補作品)	北川隆子(一般人)	観光地
9	1964(昭和39)年9月 (表紙)	特集「この秋・話題の観光地」		観光地
10	1964(昭和39)年9月 (pp. 63–65)	さいはての国立公園・知床の魅力<新 しい国立公園探訪シリーズ3>	瓜生卓造(山岳小説家)	観光地
11	1964(昭和39)年9月 (pp. 66–67)	知床半島ガイド		観光地
12	1965(昭和40)年7月 (p. 77)	知床小唄をうたうとき	森繁久彌(俳優)	回想記
13	1965(昭和40)年7月 (pp. 150–151)	一地の果てへのガイド—知床		観光地
14	1966(昭和41)年11月 (pp. 102–107)	知床半島/原始に生きる人と海鳥	壇一雄(小説家・作詞家)	観光地

1964 (昭和39)年6月1日に知床が国立公園に指定されたことを受け、同年9月号の表紙を知床連山が飾っている。「さいはての国立公園・知床の魅力」と題し、山岳作家瓜生卓造が文章を寄せる。「知床半島の風光美は、海と山と原始林と、点在する湖沼」であり、「いまだ人間の息吹が、きわめてかすかにしかかかっていないというのが魅力である」とする。交通不便で天候が変化しやすく、羅臼岳以外の山は難業苦業であるが、温泉は豊かで、積雪期の景観や流水を絶賛する。しかし風光美としてあげた湖沼についての記載はない。瓜生の記述に引き続き、「知床ガイド」が掲載される。この年から羅臼-ウトロ間の周遊遊覧船が運航しはじめた。それまでは羅臼かウトロの一方しか探勝できなかったため、その不便を解消した直通遊覧船の運航は新国立公園観光のニュースであるという。ウニや毛蟹などの海の幸、登山ルートについては羅臼岳と硫黄山、斜里岳について紹介される。

観光拠点としては、知床岬と灯台、セセキ温泉、羅臼温泉、羅臼湖、知床五湖、海別の遺跡、オシンコシンの滝、そして岩尾別温泉をあげる。羅臼湖について、人跡まれな山の上の湖であるが急峻ではないのでハイキングに適する、という。知床五湖は特に紅葉期の素晴らしさをあげ、ハイキングに適するとする。文末には羅臼と斜里の宿泊施設25軒と、遊覧船の時刻表が記載されている。

1965 (昭和40)年7月の俳優森繁久彌による「知床小唄をうたうとき」は回想録である。映画『地の涯に生きるもの』のワンシーンの写真が当時の回想とともに掲載されている。同号には「地の果てへのガイド 知床」として、冒頭に「地の果てブームの中でも特にクローズアップされているのが、昭和39年に国立公園に指定された知床だ」と述べ、最近訪れる人が非常に多くなったとしている。羅臼とウトロの2つの探勝口をあげ、前者は羅臼温泉や間欠泉、ヒカリゴケの洞窟と合泊、セセキ温泉、千島の眺望を、後者は海岸美と知床温泉、岩尾別温泉、知床五湖、羅臼岳を紹介している。20の宿泊施設とバス、観光船の時刻表と運賃表が掲載される。

1966 (昭和41)年は小説家・作詞家の壇一雄によ

る紀行文「知床半島/原始に生きる人と海鳥」である。羽田から札幌を經由して女満別空港に降り立ち、知人の世話になりつつ、トウモロコシや帆立貝、毛蟹、イクラ、ヤマメ、ホッカイシマエビ、マタタビの実など知床の食の豊かさを堪能している。この時期はすでに道路がカムイワッカまで通じており、イワウベツの鮭の孵化場を見学し、岩尾別温泉の温泉旅館「地の涯」で昼食をとり、開拓農地のトウモロコシ畑を車窓に見ながら、知床五湖を見学、その後カムイワッカ湯の滝まで向かう。翌日は船に乗って、海から見る断崖、奇岩や海鳥、硫黄山の火口や噴煙、多くの滝、漁師番屋について感情を込めて記している。表題よりも観光を楽しむ記述となっている。

### 斜里バスの観光パンフレットにみられる知床

1959 (昭和34)年から1966 (昭和41)年までに斜里バスの観光パンフレットは9部発行された(図2、表3)。これらのパンフレットには作成年が記載されていない。しかしNo. 1における斜里町の紹介文には「明治12年戸長役場が置かれた。星霜80年町政を施行して20年今や人口1万9千、…」と書かれている。1879 (明治12)年から80年経過し、町政が施行された1939 (昭和14)年から20年経過したという点、1960 (昭和35)年の人口が18,371人(斜里町史第三巻編纂委員会2004)とピークを示した時期であることから、このパンフレットの発行は1959 (昭和34)年であると考えられる。続くパンフレットについても斜里バスの路線ほか年代を特定しうる表現内容とメモ書きから発行年を推定した。観光パンフレットの内容は、形式や記載内容に違いがみられるものの、おおむね表紙と概略図、写真、観光拠点の解説などが盛り込まれている。概略図の範囲は知床半島をメインとしつつ、屈斜路湖、摩周湖、阿寒湖、網走湖、能取湖、サロマ湖までを含んでいる。

これらの中で写真や解説文が掲載された観光拠点はのべ23箇所あり、分野別にみると自然景観として山岳4、奇岩や断崖など9、滝と湖4、植物群落1、流水1、温泉1となり(表4)、文化景観として遺跡2、人工物1となっている(表5)。なお、ウ



図2. 1959(昭和34)–1966(昭和41)年に発行された斜里バスの観光パンフレット。上列左から表3のNo. 1–5, 下列左からNo. 6–9(斜里バス株式会社蔵)。

表3. 1959(昭和34)–1966(昭和41)年に発行された斜里バスの観光パンフレットの表題, 発行および形状。

No.	発行年	表題	発行	形状
1	1959(昭和34)	新しいしやりの観光	斜里バス, 斜里町観光協会	一枚四つ折り
2	1960(昭和35)	秘境知床半島	斜里バス, 斜里町観光協会	一枚四つ折り
3	1961(昭和36)	秘境知床	斜里バス, 斜里町観光協会	一枚四つ折り
4	1962(昭和37)	秘境しれとこ	斜里バス, 斜里町観光協会	一枚四つ折り
5	1962(昭和37)– 1963(昭和38)	夢の秘境しれとこ 国立公園候補地	斜里バス, 斜里町観光協会	一枚四つ折り
6	1962(昭和37)	しれとこ	北海道斜里町, 斜里バス	小冊子
7	1964(昭和39)	国立公園 夢の秘境 しれとこ	斜里バス	小冊子
8	1965(昭和40)	国立公園 夢の秘境 しれとこ	斜里バス	小冊子
9	1966(昭和41)	Shiretoko National Park 夢の秘境しれとこ	斜里バス	小冊子

ミウやオジロワシ, エゾシマリス, アザラシなどの鳥獣についてもパンフレットでは取り上げているが, 観光拠点とはならないため本分析では対象外とした。

まず山岳についてみると, 斜里岳や羅臼岳, 硫黄山については登山客のために継続して詳細な情報を提供する。海別岳はハイキングとスキーを取り上げるが, 掲載回数が少なく2回のみとなっている(表4)。

奇岩や断崖などの地形について, ウトロに位置

するオロンコ岩に関しNo.2から継続的に, アイヌの伝説を交えながら紹介する。No.2–5の4回にわたり記載された扇状地は, ポトピラベツ川口付近とウプシヌツタ川(現在のウプシノツタ川)付近の扇状地帯について説明している。他に, 風船岩や観音岩など奇岩が紹介されるものの, 統一した傾向はみられない。プユニ岬について, はじめはその地形についての写真が掲載されていたが, No.9では風景の良さをアピールするようになっている。

表4. 斜里バスの観光パンフレットに紹介された自然景観の観光拠点.

No. <sup>a</sup>	山										奇岩, 断崖				滝, 湖			植物		流水		温泉
	斜里岳	羅白岳	硫黄山	海別岳	オロンコ岩	風船岩	蛸岩	知床半島先端部	獅子岩	観音岩	扇状地	象岩	ブユニ岬	オシンコシンの滝	知床五湖	カムイワッカの滝	カシユニの滝	斜里海岸草原群落	流水原	流水	イワオベツ温泉	岩尾別温泉
1	○					○															○	
2	○				○		○		○											○		○
3	○				○		○													○		○
4	○				○															○		○
5	○				○															○		○
6	○				○															○		○
7				○	○											○						○
8					○																	○
9	○				○																	○

<sup>a</sup>表3による.

滝と湖は、国道334号沿いのオシンコシンの滝は滝自体の素晴らしさと、ここからの景色の良さの両面がNo. 2より継続して取り上げられる。一方、知床五湖が地図上に登場するのはNo. 3からで(図3)、説明文や写真がみられるようになるのはNo. 5からとなる。カムイワッカの滝やカシユニの滝のように断崖から流れ落ちる滝については、No. 5から取り上げられるようになるが、継続してはいない(表4)。

植物については、斜里海岸草原群落のみが、石川啄木の短歌「潮香る北の浜辺の砂浜のかのハマナスよ今年も咲けるや」とともに天然記念物として継続的に紹介される。

流水は知床の冬の特徴として、No. 2から継続的に記載される(表4)。No. 7から掲載される写真の流水は海に浮かぶものであり、海を埋め尽くしている状態ではない。

知床には良質の温泉があるが、継続して掲載されるのは岩尾別温泉のみである(表4)。羅臼温泉は概略図中に記載されるだけであり、図上には海別岳近くのサマツキヌプリ周辺に温泉マークが継続的に記載されるものの、場所が一定していない。

文化景観としては、先史時代の遺跡として、海別の千穴(現在の朱円竪穴住居跡群)と朱円ストーンサークル(現在の朱円周堤墓)がNo. 2からNo. 5まで継続して紹介される。しかしその後、朱円ストーンサークルは地図には載るものの紹介はなくなり、海別の千穴は概略図からも消えていく。一方ウトロ港はNo. 4から国立公園指定後まで継続的に紹介されている(表5)。

No. 5は国立公園候補地であることを意識しており、観光拠点の掲載件数が多くなっている。No. 5には森繁久彌作詞作曲の「しれとこ旅情」の歌詞と楽譜が掲載される。しかし、No. 2-4と7-9では「北の知床」(大塚みつる作詞、渡部三郎作曲)の歌詞が掲載される。作詞の大塚みつるは小清水町立止別小学校と美幌町立東陽小学校の歌詞を手掛けているが、詳細は不明である。

No. 7からは、景色の良さをアピールできる拠点を取りあげる一方で、先史時代の遺跡という文化的な観光拠点を除外している。代わって観光拠点



表5. 斜里バスの観光パンフレットに紹介された文化景観の観光拠点.

No. <sup>a</sup>	遺跡		人工物
	海別の千穴 <sup>b</sup>	朱門ストーンサークル <sup>c</sup>	ウトロ港
1			
2	○	○	
3	○	○	
4	○	○	○
5	○	○	○
6			○
7			○
8			○
9			○

<sup>a</sup>表3による.

<sup>b</sup>現在の朱門堅穴住居跡群.

<sup>c</sup>現在の朱門周堤墓.

としての知床五湖の美しさ、素晴らしさをアピールする解説文や写真が使われるようになる.

### 黎明期の知床観光—結びにかえて

これまでの分析から、以下の点が明らかとなった.

1960(昭和35)年、映画『地の涯に生きるもの』に連動する形で知床のテレビ番組が制作され、その内容が番組紹介として朝日新聞に掲載された。これ以降、朝日新聞上で知床に関わる探検などの記事はなくなり、数は多くないものの、国立公園化への動きと自然や産業の紹介記事がみられたことから、知床を観光地として認識し始めたことみなすことができる。しかし、その記事は秘境、僻地、田舎といったイメージを伝えるものが目立ち、具体的な観光拠点に関する記述は乏しく、観光する環境が整っていないことが強調される内容であった。

雑誌『旅』では、1959(昭和34)年の記事から、知床を観光地として取り上げるようになる。交通の不便さや寒さを強調しつつ、それをも観光資源として紹介している。取り上げる観光拠点は山、奇岩と断崖、岩尾別や羅臼などの温泉が継続してみられ、1960(昭和35)年からはオシンコシンの滝が、国立公園に指定された1964(昭和39)年からは知

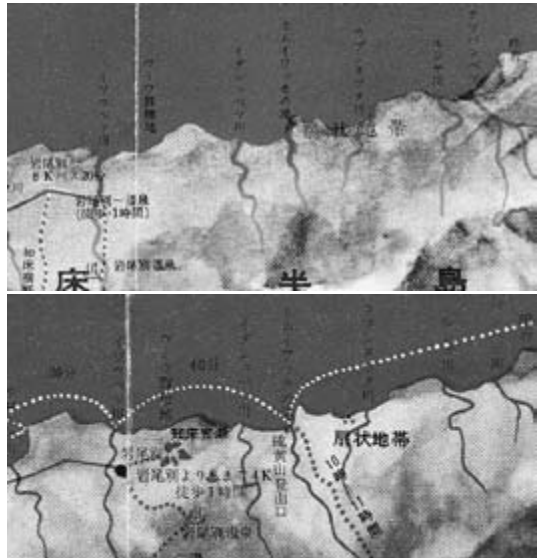


図3. 知床五湖の出現前後. 上: 1960(昭和35)年発行の観光パンフレットの地図(表3 No.2, 部分). 下: 1961(昭和35)年発行の観光パンフレットの地図(表3 No.3, 部分).

床五湖が継続して紹介されている。1965(昭和40)年頃から知られるようになった(午来2007)という羅臼湖も、1964(昭和39)年すでに登場していた。同年には海別の千穴やストーンサークルが紹介されるが、羅臼湖とともに、この年限りのものであった。

新聞と雑誌の内容に影響を与えたものとして、1960(昭和35)年公開の映画『地の涯に生きるもの』と原作者戸川幸夫の活動がある。戸川は知床を紹介するテレビ番組に出演し、雑誌に記事を寄せ、さらに書籍を出版する。戸川(1961)は「最近になって、にわか訪問者の数を増やした。各大学の学術研究班が調査にでかけたり、登山隊が知床山脈の縦走を試みたり、映画が製作されたりしたことで急激に人目をひくようになったのだが、根本は、知床がもつ、はかり知ることのできない神秘さ、原始と野生の魅力がものを云っているのだ」と述べている。

また、1962(昭和37)年に北海道旅行をした折に知床を訪れたという秋山洋子氏は、1961年のベストセラーである小田実の旅行記『何でも見てやろう』について、欧米と比べ経済的にまだ豊かで

なかった日本において、当時の若者に旅をすることの意義を体当たり的な旅で体現した旅行記であり、知床を訪れる若者に少なからず影響を与えたであろうという（秋山への聞き取り、2009年6月30日）。

以上のように、中央のメディアでは観光地として知床が紹介され始めていた1959（昭和34）年から、地元ではパンフレット作成、観光拠点づくりが模索される。1960（昭和35）年ごろ斜里町役場では「知床五湖」の名称を決めた（西村2004）ように、地元も新たな観光拠点を作るべく動いていた。斜里バスの観光パンフレットにみる知床の観光拠点は、1962（昭和37）年頃から、遺跡のような文化的なものや扇状地がみられなくなり、知床五湖やプユニ岬など自然を探勝するものとなってゆく。これは1961（昭和36）年の国立公園候補地になったことで、優れた自然の景勝地であることをより強調しようとしたと思われる。

知床における観光拠点は、メディアの影響を受けつつ、国立公園化の動きの中で文化的なものを排除し、国立公園として求められる傑出した自然の風景地であることが明瞭な観光拠点へと変化していった。現在の知床における観光拠点の考え方の原形は、この時期にある程度できあがったといえよう。

本研究では、観光資料を用いて1950年代-1960年代を中心とした知床観光の黎明期における観光拠点の変遷について考察した。続く1960年代-1970年代は、観光地化の進展とともに開拓者と開拓地についても考察していく必要がある。これらを今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究に対し、斜里バス株式会社の方々には大変お世話になり、資料閲覧に際してはご配慮を賜りました。また、斜里在住の森信也氏、駿河台大

学の秋山洋子教授には貴重な情報をいただきました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

本研究の一部は「駿河台大学教養文化研究所所員会議」（2009年6月25日）にて報告した。

## 引用文献

- 池田勝・永吉宏英・西野仁・原田宗彦. 1989. レクリエーションの基礎理論. 276 pp. 杏林書院, 東京.
- 小田実. 1961. 何でも見てやろう. 352 pp. 河出書房新社, 東京.
- 乙部純子. 2008. 昭和初期の知床観光: 「観光の斜里岳と知床半島」にみる地域の魅力. 知床博物館研究報告 29: 43-57.
- 乙部純子. 2009. 特集開拓農家とその時代・昭和30年代の知床. SEEDS 201: 1-6.
- 午来昌. 2007. 大地の遺産: 知床からのメッセージ. 282 pp. 響文社, 札幌.
- 佐藤郁夫. 1999. 北海道観光史. 産研論集 22: 22-47.
- 斜里町史第三巻編纂委員会(編). 2004. 斜里町史 3. 1242 pp. 斜里町, 斜里.
- 斜里バス社史編集委員会. 2000. 斜里バスのあゆみ: バス創業50周年を記念して. 45 pp. 斜里バス株式会社, 斜里.
- 白幡洋三郎. 1996. 旅行ノススメ. 中公新書 1305. 256 pp. 中央公論社, 東京.
- 梅嶺レイ. 2007. 知床開拓スピリット. 251 pp. 柏樽舎, 札幌.
- 戸川幸夫. 1961. 知床半島. 225 pp. 新潮社, 東京.
- 西村一郎. 2004. 知床から: 地の果ての観光文化のまちづくり. 221 pp. 連合出版, 東京.
- 羅臼町百年史編集委員会. 2001. 羅臼町百年史. 1384 pp. 羅臼町, 羅臼.

付表 1950 (昭和25) - 1966 (昭和41) 年に雑誌『旅』でとりあげられた知床の記事の内容。

No.	イメージを醸成する記述 <sup>6</sup>	具体的な観光拠点							
		山	奇岩、断崖	滝、湖、河川	植物	流水、海	温泉	遺跡	人工物
1	羅臼は道内一の漁田で裕福な村/夜半の熊の出没/義経弁慶の故事伝説/石燕/鷹の巣/ホッキギキ等多し/土人の惨状/自然風物の特異性と天下の奇勝が未だ廣く知られてゐないのは惜しい	硫黄山 <sup>6</sup> /知床岳	知床岬 <sup>6</sup>	フレベ			ラウス温泉/ セセキ温泉	イジャ(伊茶仁), チ ウルイ(忠類), コタ ベツの番屋/羅臼 ヌカ(古多糠), クン ネベツ(薫別)の合 戦の趾・磐趾	チ タツカルウシ, チ ベツの番屋/羅臼
2	寒さ(零下30度)/馬の放牧/黒田夫妻の冬山征服/囚人によるチアドマリ〜ウトロ間の道路建設/アザラシ/野生美/先住民族の遺跡	斜里岳 <sup>6</sup> /羅臼岳	海岸線の奇岩	瀧沸湖/瀧釣沼	斜里海岸の高 山性植物(天然 記念物)	イワウベツ 温泉		斜里の町	
3	羅臼の漁業/鷹・スケソ・鯀・鱒・鳥賊・大鯰/真っ黒い大きな鳥/目梨昆布/鮭のルイビ/人喰事件/最東北端の部落/どぶ湯/国後島からの脱走入夫が凍傷で両足切断/零下20度	羅臼岳/硫黄山/ 知床岳	観音岩/赤岩		流水	合泊/羅臼温 泉		羅臼の町 <sup>6</sup>	
4	ウミウの大群/海豹/断崖からの滝	羅臼岳 <sup>6</sup>	風船岩 <sup>6</sup>		流水	イワオベツ の秘湯 <sup>6</sup>		キャンブ小屋/羅臼の 町/羅臼港 <sup>6</sup>	
5	目梨昆布/ハンノキ/アザラシ熊/大風呂敷話/ソ連のみえる岩風呂/「どぶ湯」/巨大カジカ	羅臼岳 <sup>6</sup> /硫黄山 <sup>6</sup>			流水	漸石温泉/合 泊温泉/羅臼 温泉		羅臼の町/羅臼港	
6	北海道最後の観光地/陸の孤島/買出しの小舟 <sup>6</sup> /知床半島にはほとんど道がない/ウトロに一軒だけのバーマネント店 <sup>6</sup> /高山植物/マスの定置網漁 <sup>6</sup> /ウミウの大群 <sup>6</sup> /断崖からの滝 <sup>6</sup> /エゾ松の原始林	羅臼岳	ウトロの奇岩 /ローソク岩 /オロンコ岩 <sup>6</sup> / オシッコシン 岩場 <sup>6</sup>		硫黄岳や知床 岳のハイ松	岩宇別温泉 <sup>6</sup>		マス漁の番屋 <sup>6</sup> /岩宇別 部落 <sup>6</sup>	
7	海鳥の乱舞/鷹や海豹や海馬/鯨/イルカ/漁船で観光/番屋に宿泊/寒い/毒虫/白鳥/青鷲/自然美	知床連山の眺望/ 知床岳/硫黄山/ 羅臼岳登山	風船岩 <sup>6</sup>	オシッコシンの鼻 と夫婦滝/とうふ つ湖	ヒカリゴケの 洞窟/原生花園	羅臼温泉		羅臼の町/ウトロ港	
8	人のいい若いバス運転手/雲丹/突き刺さる寒さ/漁船による観光/奇岩絶壁の美/カモメ/ウ/カモ/板状節理, 柱状節理の岩/観光地北への困惑	知床連山 <sup>6</sup>	シャッコツ崎/ 象の鼻	オシッコシン崎・双 美滝	オホーツク海			斜里の町/宇土呂/宇 土呂館	
9		知床連山 <sup>6</sup>							

付表. 続き.

No. <sup>a</sup>	イメージを醸成する記述 <sup>b</sup>	具体的な観光拠点							
		山	奇岩, 断崖	滝, 湖, 河川	植物	流水, 海	温泉	遺跡	人工物
10	プーム/国立公園の指定/陸の孤島/知床の地下資源と鉱山師/盆栽職人の白骨/ウミウ/イルカ/国後島/50を超える河川/大森林/岩魚/適切な開発の必要性	斜里岳/海別岳/速音別岳/チニンベツ岳/羅臼岳/硫黄岳/知床岳	風船岩	羅臼湖/知床五湖/オシンコシンの滝	斜里/網走の原生花園	海/流水	岩尾別温泉/瀬石温泉/合泊温泉/羅臼温泉	遺跡	人工物
11	6月1日から羅臼〜ウトロ間周遊遊覧船運航/断崖/奇岩/怪石/海鳥/瀑布/壁柱/国後島/ウニ/毛ガニ/黒百合/ガンコー蘭/ハマナス	羅臼岳/硫黄山/斜里岳	知床岬/風船岩/ワシ岩/メガネ岩/ライオン岩	オシンコシンの滝	マツカウスの滝	セセキ温泉/岩瀬白温泉/尾別温泉	海別の千穴	知床岬の灯台	
12	ラウスの町の引揚者/国後への思い/知床旅情の歌詞								
13	原始林/人跡未踏の原始境/ひ熊/絶壁/滝/オジロワシ/ウミウ/ウニ/ネコ/トド/アザラシの菜園	羅臼岳/硫黄山	ウトロ港の海岸美	オシンコシンの滝/知床五湖	光苔の洞窟	羅臼温泉/間欠泉/合泊とセセキ温泉/知床温泉/岩尾別温泉			
14	与謝野晶子の詠/アザラシ/帆立貝/毛蟹/シンバクの巨木/漁師のホラ唄/宇土呂のヌシ桂田敏二さん/アキアジの網入れ/尾白鷲/玉蜀黍/ヤマメ/アウケル/イ川の番屋/海鳥の群れ/白い鳥の糞/硫黄山の火口と噴煙/滝/ルシヤモン(風)/「オトド」と呼ばれる番兵/盗掘者の白骨死体/デラッククスな観光船/昆布番屋/アキアジ番屋/巡廻授業/イカ漁/オシヨロコマ/開拓農民/マタタビ/ブト(ブユ)/ナカマド/ウミウ	知床連山/羅臼岳/硫黄山	平坦な岬/赤岩/ベッキンノ鼻/夫婦岩	オシンコシンの滝/カムイワツカの滝/知床五湖/イワウベツ川	ヒカリゴケの洞窟	流水/オホーツク海	網走の水族館/宇登呂/宇土呂神社/望郷台/サケのふ化場/温泉旅館「地の涯」/羅臼の波止場		

原文に従ったため、表記は統一していない。

<sup>a</sup>表2による。

<sup>b</sup>行くことができない場所、具体的な地名表記がないもの。

<sup>c</sup>写真掲載があるもの。